

Title	奨励作法をめぐって
Author(s)	小倉, 義明
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume27, 2012.3 : 123-137
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3900
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

奨励さくほう作法をめぐって

小倉 義明

本日のテーマは「全学礼拝の豊かな守り方」であります。しかしこのテーマでは大きすぎる、広すぎるテーマですので、「奨励」に限定させていただきました。「奨励」もその作法に限定しました。作法という言葉はあまり一般的ではないかもしれませんが、あえて私の用法として使わせていただきました。皆様が全学礼拝でのご用を大変的にお考えくださり、心を傾けて準備されておられる様子を見聞きするに及びまして、いささかなりとも皆様のご努力のご参考にしていただければと思います。そういうわけで、これから申しあげるのは私なりの一つの切り口と申しましょうか、理解の仕方でありまして、こうでなければならぬ規範というわけではございません。神学校で行われる説教教学のようなつもりで私はお話するつもりはございません。もう少し自由な仕方でお話をさせていただきます。

一 礼拝と奨励

まず礼拝と奨励ということをご一緒に考えてまいりましょう。と申しますのは、礼拝とは何か、奨励とは何かと

いうことを考えておくことが、礼拝の奨励に召し出された私どもの、一番最初に念頭に置くべき事柄だからであります。この点が十分に捉えられておりませんと、私どもの奨励が何となく各自の学問の専門分野における感想のような、ご披露のようなものになりがちだからであります。

まず礼拝とは何か。そのことを、わかりきったことのようにすけれども、あらためて考えてみたいと思います。礼拝とは、神のみ旨とみ業にあずかり、悔い改め、感謝と賛美を神に捧げること。ひとまずそのように言えると思います。

奨励とは、そうした礼拝の、——神の福音の働きにあずかって、そして悔い改めをなし、感謝を捧げる礼拝の——目的実現のために、言葉をもって会衆に教え勧めること、というふうに言えるかもしれません。説教と奨励とはどう違うのですかと、時々聞かれることがあるのですが、ここでは両方の意味を込めて、教え、勧めることと、ひとまず包括的に申しあげておきたいと思えます。

奨励者の態度——会衆の窮境と困窮を前にして

次に、私ども奨励の務めを与えられた者はどのような位置にあるか、どのような態度であるべきなのかということを考えてみましょう。一言で申しますと、奨励者は神と会衆との間にある存在であります。神様は私どもにとつては超越のお方であり、目に見えないお方です。どうしてその神秘なるお方を語り伝えられるでしょうか。他方、私どもには会衆があります。その会衆はどなたも例外なく、ある人間的な深い課題を抱えておりますでしょう。人間的に重い課題、困窮を抱えない人はいないと思えます。礼拝というような場所だからこそ世間の人々の前では正直に表せない困窮、あるいは自覚しにくい困窮、内面的な深い魂の喘ぎをそこでは自覚できるのではないでしょう

か。会衆は困窮を抱えております。一方で見えざる超越的な神の前に立ち、他方で困窮を抱える会衆の前に立たされてある。これが奨励者であります。おそれと慄きなくして立ち得ません。

今、学長先生が挨拶の中に申されましたように、形と心は結びついております。今日は作法という、ある意味で技術ということにまで踏み込んだお話をさせていただきましたが、しかしどうしてもその前に心に行かざるを得ないと思えます。見えざる神について証しをせねばならないということと、また困窮を持つ人々にどれだけの事柄を語り得るかという課題を思いますときに、私たちは本当におそれと慄きを持たざるを得ません。とくに牧師職ではない方々がこの場所に立つときに、一週間ずつと大変だったとか、ひと月の間考えてきましたとおっしゃる言葉を時々聞いております。さもあらん、それほど事柄だと思っております。キリスト教は特別に啓示宗教と言われているのであり、人間的な工夫や努力で切り開かれていくものと言えない。やはり上から示される神の神秘に触れることが、私どもの信仰の一番深い所にある特殊性、特質だと思えます。他方、会衆の現状は下からも問いかけてくる。そうすると、奨励者は、上からと下からの間にあるわけです。

この神の神秘は全然理解不可能か、見えないものか、掴みどころのないものかというところ、そうではないのです。レジュメには和解ですとか、犠牲、赦し、愛というような言葉で書き表しましたが、神の神秘はこのような言葉をもって開かれるのではないのでしょうか。それらの言葉を通して、私どもは神秘の扉の内側を少しく覗けるようになるのです。そうした神の愛の神秘を、人々にいくらかでも伝え得るならば、それは人々の困窮に対する慰めとなり、励ましとなり、また助けとなるであります。私どもの奨励はそこまで行きたいものであります。

奨励を形づくる二要素

そういうわけで、今申しあげましたように神の神秘と人々の困窮というこの点が、奨励を形づくる二つの要素だと言つてよろしいのではないのでしょうか。神の神秘を別言しますと聖書であります。聖書は私どもの信仰と生活を導く規範であります。その聖書を大事にする。聖書こそ私どもの奨励のアルファでありオメガではないでしょうか。聖書を大事にする。そのことから代々の教会の教えが語られてまいりました。受け継がれてまいりました。教義ですとか、教理ですとか、信条というようなかたちで、聖書の中核的な教えが定式化されてまいりました。それを私たちは学んでおき、理解しておきたいものだと思います。

それとともに会衆の問題状況、二ードも考えてみます。聖書の語る教えとともに会衆の問題状況を念頭に置く。そうすることによつて、私も奨励者の語る言葉が単なる教理、信条を繰り返すというだけに留まらない、勧めになつてゆくのではないかと思うのです。もつと申しますと、それは語る者の実存的な主体をかけた表現という性格を持たざるを得ないと思います。持つはずだと思います。会衆は奨励者の言葉を通して、ある学説を聞いて理解するというもの以上のものに触れるのではないのでしょうか。また触れることが期待されております。奨励者の奨励の言葉が、聞く人の心に留まると言いましようか、心に浸み入る、心に受肉することです。それは、聞く者が語る者の言葉の中に、語る人の真実さ、真摯さを感じ取つて納得するということか、共鳴することではないのでしょうか。奨励はそこまで行きたいものであります。

学内礼拝の特質

さて「礼拝と奨励」について、最後に考えておきたいことは、学内礼拝の特質であります。会衆の多数は学生で

あります。もちろん同僚の教職員がおりますが、しかし大多数は私どもの手に委ねられた、教育指導すべき学生諸君であります。つまり年若い者、あるいはいろいろな意味での初心者であります。もう一つの特質は、私どもに与えられている礼拝時間の制約であります。二〇分間、実質一五、六分しかありません。そして奨励の話そのものは七分か八分であります。この短く制約された時間の中で一つのまとまった話をするというのは、至難のことです。この会衆が学生であるという特質と礼拝の持ち時間から来る制約は、私どもの奨励作法に影響しないわけにはまいりません。すなわち聞き手へのメッセージは、ある限定を受けざるを得ません。教会の聖日礼拝は老若男女さまざまな人々がおります。そうした人々に比べて、やはり聞き手の多くは学生諸君であるということ、そうした学生諸君へのメッセージということで、メッセージの方向性あるいは素材というものが決められてくることになりましょう。それから礼拝時間の制約という点から言っても、私どもはあれもこれも語りたけれども、その多くのもは割愛せざるを得ません。あれもこれも入れたいと思っておりますと、そちらのほうに気を取られて、最も語らねばならない部分の確保が難しくなります。

私が本学で先生方の奨励を伺っておりますと、九五パーセントは皆様ちゃんとした準備をなさっております。ほとんど完全原稿に近い原稿を持ってこの場所に上がっておられるご様子を拝見しております。持ち時間の制約ということから言いますと、あらかじめ十分な時間をかけて準備をした上でないと、例話などをしていううちに時間が来て、一番語りたかった結論部分が語れないままに終わってしまったなどということになりかねません。幸い本学ではそういう例はあまり見られない。立派だと思えます。

二 奨励作法

さて、いよいよ奨励作法という、ある意味で技術的な話になるかもしれませんが、あえてそのことに踏み込んでまいりたいと思います。

着想

まず奨励をするときに、誰しも着想をいたします。自分は何月何日、奨励の務めを与えられたけれども、さて何を話そうかとどなたも考えます。牧師職にある私どもでもそのことを思つて緊張し、またずっと考え続けております。日曜毎の礼拝説教は一週間中ずっと考えております。あるときに、「そうだ、このことについて語ろう」というふうにする。これは同僚の牧師職の皆さんはどういうふうにしておられるか、私はあえて聞いたことはありませんし、牧師たちはそれぞれ大変な緊張をもつてこの課題と取り組んでいて、軽々しくお互いに言うことはないのです。おそらく私も牧師たちの間でも、このような話をするのは初めてだと思ひます。

まずは率直に私なりの暫定的なこととして申しあげますと、着想というのは、真珠貝の核入れの作業、あるいはそのプロセスに似ていると私は思ひます。その真珠貝の核入れの核というのは、一つは明らかに聖書もしくは聖句であります。先ほど聖書は重要ですが、これは奨励にとつてのアルファでありオメガですと申しあげたとおり、これが軽んぜられて、第二義的、第三義的になると奨励にならなくなります。聖書もしくは聖句はアルファでありたいと思ひます。

次に、先ほど来申しあげたように、会衆の状況であります。新学年の時で、学生諸君が嬉々として新しい学年の装いをし、その雰囲気を持っているのに、奨励者は学年度末の卒業期の話をするにはあるまいと思えます。また教会の礼拝で行われるような、例えば死者や重い病者、病む人のことを念頭に置いたような話をするのではないだろうと思えます。つまり状況ということ念頭に置いて話すことが望ましいと思えます。私どもは奨励を依頼されたときに、何を語ろうかと思うときに、やはり学生たちに何を語ったら彼らの助けになるだろうかということ、やはり考えたいと思えます。

第三に経験であります。レジユメにはあえて身辺の経験と書かせていただきました。これは私のという意味です。あるいは私どもの経験であります。私の主体的な経験と思索を飛ばしたような一般的な話をして、それは教えになるかもしれませんが証しにはなりません。永遠のカンタータを私たちは歌うわけではなくて、私にとって切実な私にとってこういう内的な経験があつて、だから私はこう思うのです、そうではないでしょうかという訴えが、人々の心に響くのではないのでしょうか。そこが教えと証しの違いだと思います。

音楽の先生がおられますが、独唱にせよ合唱にせよ、その都度その都度歌いますね。その歌はその場限りです。一月、二月、三月とずいぶん練習に練習を重ねてきたのに、発表して皆さんに聞いていただけるといふのは一回、せいぜい二回です。しかも、歌声というのは消えてしまいます。それでも歌うのはなぜでしょうか。すばらしい音楽を聞くことと思えば、CDで機械を通して、最高の歌い手さんたちの歌を何度でも聞けるでしょう。でも私たちは学生諸君の合唱を聞くときに、それは芸術的には一流の歌い手さんたちが歌うようなわけにはいかないでしょうけれども、その場で歌っている学生たちの歌声を聞くと、涙が出てくるほど感動させられます。その人の生き方を通して語る、そういう証しの要素がやはり欠かせないと思うのです。

そういうわけで、着想、コンセプトアライゼーションとも言いましようか、これは奨励者の心に与えられたステイグマ（聖痕）だと思うのです。ある種の傷です。それは痛みの経験であります。しかしその切実さのゆえに、「そうだ、私はこういう証しをしたい。こういう奨励をしよう」という最後の決心になるのです。さしあたって今私ができることはこれしかないと思うのです。

構成

では、構成はどうなるでしょうか。これも技術的な点に話が及ぶのですが、お許しください。三部構成もしくは四部構成というふうに考えられると思います。

三部構成で申しますと、序、破、急。第一番目がイントロダクション。導入部であります。そこにまず聖書の提示がなされます。そして直ちに主題の提示に入ります。そうでないと持ち時間は七分か八分ですから、あまり余分なことは言えません。「何章何節から何節まで読みましたが、ここで問題になっているテーマはこの点ではないでしょうか」とか、「こういうことと、こういうことが問題であると思いますが、今日はこの点についてとくに考えてみたいと思います」というように、素早くそのテキストからある主題を抽出して提示することあります。それを受けて、聖書が語っているメッセージと思われるその主題を、先ほど来申しあげておりますように、自らの経験を通してテキストに共鳴するのです。その経験は、それも必ずしも自分の内面的なことだけでない、政治、社会、経済、そういうような物事に対する広い意味の経験の場合もあります。いずれにしてもそうした諸経験を通して、テキストから教えられた、示された主題に共鳴するのであります。そして最後に結び。これは狭い意味の勧めであります。

四部構成の場合は起承転結というかたちになるでしょう。そのときはまずテキストが示され、続いてそのテキストの取扱い上のことが語られて、しかる後に主題の提示というふうになります。三部構成の場合は一だけでまとめられているものが、やや長く取り扱われることになると思います。テキストの処理が必要な場合、それが少し長くなつて一と二に分岐するでしょう。そして三と四は同様であります。

聖書の重視

先ほど来申し上げていることですが、聖書の重視が大事です。テキストから始まってテキストで終わる、あるいは聖句で結ぶと言いましたのは、これは会衆がその礼拝を終わった後に、今日の礼拝で奨励を通して何を聞いたかと、パツと頭に思い浮かばないようだと困るからです。やはりある長い箇所である場合には、一句だけに絞る。あるいは何章何節ではなくてフレーズだけになるかもしれません。私は教会での礼拝のご用を与えられるときは、いつもそうだとは限らないのですけれど、文語訳聖書に親しんできたものですから、文語訳聖書の聖句をそのまま説教題に掲げることが割合多いです。いずれにしてもテキストから始まり、そしてテキストで終わる、ある聖句で結ぶという心構えでいただきますと、聞いた人々はそれで今日のメッセージの主題、語り手のメッセージはこういうことだったなというふうな記憶に残ります。別言いたしますと、奨励者は聖書に拘束されるのです。あえて拘束されるという言い方をしましたが、拘束されませんと奨励になりません。自分の感想程度になつてしまうのです。専門の話をしている限りは他の人は追従できませんから、その人の独壇場ということになります。もう少しが、それは学問や思想の方面での教え、講演にはなつても、聖書の奨励にはなりにくいでありましょう。もう少しニュートラルな表現で申しますと、聖書に方向づけられる。それが望ましいと思います。

テキストの主題と経験

そして、テキストの主題と経験。これは説教で言うときとデイベロップメントと言うのです。イントロダクションに続いて、デイベロップメント。私どもの信仰は、経験界の事象と、神の国の奥義——神の国の神秘との間には、断絶ではなくて何らかの意味で関係がある、つながりがあるという信仰ですね。超越と地上界とは断絶しているのではなくて、どこかにつながりがあるという信仰であります。ということは、私どもの経験界を注意深く、丁寧に反省し、思索するならば、神の国の奥義がほのかに捉えられるのではないのでしょうか。論理も無論大事です。私どもは知性を最大限に使い、論理を用いて探究いたします。しかし詰まるところ、論理よりもむしろイメージで悟る。この要素が最後は残ると思います。主イエスの譬えも論理の積み重ねというふうには言えないと思います。イメージもしくはピクチャーではないでしょうか。そのことをひとまず申しあげて、経験を語るときに、全体像をお示しすることになろうかと思えます。

私は教会のある人にこういうふうに言われたことがあります。この方は大変立派なよい信仰者で、忠実に教会生活を守る方ですが、その人があるときこういうふうに言いました。「説教を聞いていて、いろいろないいことを教えてもらうけれども、そしてそれは有益だけれども、最後は神様が出てきて、神様へ飛んでしまうのですよね」と言うのです。いろいろな人間の経験界の話は有益で面白い。だけど最後は神様に行ってしまうと、神様にバツと飛んでしまうのだと。それがわからないと言ったのを私は興味深く聞きました。それに対して私の返答は、「そのとおりです」ということなのです。説教とか奨励は飛ぶのです。飛ぶ要素がないと、説教や奨励にならないと思えます。理

詰めだけで神の見えざる世界には到達できません。バベルの塔ではありませんが、私たちは理屈だけで、論理だけで神様の神秘には到達できないと思います。ですからギリギリまで私たちは知性を用い、論理を用いてわかろうと努力しますし、またそうでなければならぬと思います。最後は飛ぶのです。そういう意味で、先ほど申しあげた「イメージ」は飛ぶのです。論理の組み上げによつては達せられない高みを飛ぶのです。

詩の言葉は包みません。論理は事柄を切り刻むのを得意といたしますが、包括するのは苦手です。世界を包括できるような論理を見出すのは大変だと思えます。論理は分析し、切り刻むのを得意とします。論理が氷の刃だと思すと、それを包む鞘は詩の言葉ではないでしょうか。主イエスの語る天国の奥義はイメージであり、詩であると思ふのです。

マタイ福音書一三章には、イエス様が天国とはこのようなものだと言つて、たたみかけるようにいくつかの譬えを教へておられます。マタイ福音書一三章の三一節。「天国は一粒のからし種のようなものである」。その小さな種が、空の鳥を枝に宿すことができるほどに大きくなる(三二節)。

次の三三節。「天国はパン種を入れたパンに似ている」というのです。婦人がそれを入れて焼きますと大きくなる。つまり天国は人々の思いを超えて広がっていくものだという教へであります。

四四節は、畑の中に秘められている、隠されている宝。

四五節、四六節は、よい真珠を見出した喜び、畑の中の宝を見出した者の喜び、が語られます。つまり天国といふのはそれほどの、尊い貴重な喜ばしいものなのだという教へであります。同じく一三章の二四節から三一節には、終末時に人々が分別されるだろうと、毒麦と良い麦の譬えです。

あるいはルカ福音書の一五章はどなたもご存じのように、三つの譬え話が出ております。第一は迷子の羊、第二

は失われた銀貨の譬え、そして第三は放蕩息子の話です。いずれも、とくに第一と第二の迷子の羊と失われた銀貨の譬えは、神様とは捜し求め給うお方だ、失われた者を捜し求めてくださるお方だということを語ります。そしてそれを見出したときの喜びが語られます。このように失われた者が神のもとに立ち帰ったときには、天に大いなる喜びがあるであろうというのです。放蕩息子の譬えも、同じ教えを語ります。第一、第二の話と少し違つて、神様は立ち帰りを待ち給うお方だという、あの父親の姿で神様の愛を示します。第一と第二の譬えと少しく強調点が違いますけれども、それでも立ち帰つた息子をかき抱いて喜ぶ。嫉妬した兄が父親に文句を言うときに、「いや、死んで生き返つたのだから、喜ぶの当たり前ではないか」と言つて、父親の喜びを最大限に描写しています。その点ではこのルカ福音書一五章の三つの譬えは、天にある大いなる喜びという点で首尾一貫しております。主イエスの譬えには、このように全体像が詩的にあるいは物語として語られております。この物語あるいは詩の言葉は、論理と違つて一瞬にして全体を悟らせてくれるイメージの働きを持つと思ひます。

三 結 語

イメージというのは飛ぶ、神の神秘へと直参するのですけれども、しかし私たちは、安易に飛んではならないと思ひます。義経の八艘飛びのようにひよい、ひよい、ひよいと、巧みに、手軽に、安易に飛びすぎてはならないと思うのです。柴田翔という作家に、『犬は空を飛ぶか』という評論集があります。その本の表題になつてゐる評論では、こういうことを言うのです。倉橋由美子という同世代の女流作家がおります。あの当時『パルタイ』という作品で注目されました。その後もよく書いています。柴田翔がここで取り上げているのは倉橋の『夢の浮橋』

という作品です。柴田翔はこの倉橋由美子の作品に感心できないと言っているのです。その理由は、倉橋さんはあまりにも安易に非常識なことを常識的に書きすぎていると言うのです。例えて言うと、犬は四足動物で地を這うものだ。犬は鳥のように空は飛ばない。しかし空を飛ぶと小説では言っている。飛ぶこともあるかもしれない。しかし日常的に飛ぶはずがない犬が、もしも空を飛ぶとしたら、これはどえらいことだ。そこには必死の格闘が、思索があつて然るべきなのに、その内なる格闘なしに易々と天を飛んでいるかのようにこの小説を描いていると言つて、このように言っています。「ただ彼は」というのは、これは倉橋由美子さんというより、もう少し一般的にして「小説家」ぐらいの意味なのですが、「ただ彼は、それが現実の経験的事実に反することを意識しつつ」、犬は普通なら飛べないのだ、地を這っているものなのだということを意識しつつ、「かつその反事実とも言うべき叙述を支えるべく、自分の精神を緊張させつつそれを書かなければならない。そうでなければ読み手はそこに書き手の恣意を感じて白けた気分になつてしまう」。「つまり夢を語る者の必死さを持たずに、世界が自分の哲学で解釈できるかのごとく錯覚したとき、読者は白々しい思いをしないわけにはゆかない」。

私はこの柴田翔と同世代なのですが、若い時代にこの批評を読んで、説教者として奨励者として私は深く反省させられましたし、今日に至るまで教えられております。日常的には空を飛ぶはずのない犬が空を飛ぶのです。復活などということは考えられない私どもの経験界の中で、復活の生命を信じるのです。これは魂の苦闘、わが身にかけ全力を傾けて告白するような類のものです。その必死さがなければ聴衆は白けてしまふだろうと、柴田翔さんの言うとおりでと思います。ですから私たちは、飛ばなければならぬのですけれども、安易に飛んではならないと思います。そのことを私どもの密かな自戒、戒めとして持ちつつ、しかし最後にこれだけを申しあげて、今日のお話の結びとさせていただきます。

私どもが奨励者としてご用を与えられたということは、神様の祝福に満ちたインビテーションなのです。招待です。光榮ある務めです。中には強いられた恩寵という言葉がありますが、「役目柄、つらいけどね」という気持ち先立つ方が多いと思います。私も昨晚、この発題講演の準備をしながら、「うーん、つらいな」と思いました。えらく立派な先生方の前でこういうお話をさせていただくのは、マネキンがショーウィンドウの前に立つたみたいですよ。今朝ほど新井明先生が「話を楽しみにしてきました」とおっしゃられ、私は緊張しました。けれども強いられた仕方であっても、この務めは必死の作業を行うという、神様から祝せられた光榮ある務めだと思います。天に大いなる喜びがあります。こういう機会が与えられなければ、天上へと駆け上るような必死の祈りはなかなか出てきませんから。あるいは「あなたはガンです」などと宣告されたようなときは、私たちはそういう気持ちになると思いますが。そうでないと日常的な中には日常性しか出てこないですから。非日常的に天へ駆け上っていくような魂の祈り、これが私たちの奨励者として求められる課題です。そのことを通して私たちは初めて、信仰というものが何かが少しかわってくるように思うのです。

作法という、聞きようによっては技術的なことにも少し話が及びましたけれども、一番深いところはやはり心だと思えます。そして奨励が人の心に触れるのは、語り手の心がやはり正直に、真摯に、真実に吐露されている限りにおいてだと思えます。そしてそれが人の心に響くのです。それが奨励の力だと思えます。そうしたものはどこから来るか。最後に申しますと、イエス様の弟子たちが悪霊を追い出そうとしたけれどもできなかった。そのときに弟子たちが主に言いました。「主よ、どうして私たちは悪霊を追い出すことができなかったのでしょうか」。主は答えられました。「この類は祈りによらずば」と言われました。私は本当にそうだと思います。人の心に触れるのには

祈りなしにはできない。「神様助けてください。この重い荷をどうして負うことができるでしょうか。神様赦してください。どうしてもこの私にあなたを証しすることなどできるでしょうか」。そういうおそれと慄きを持ちつつ、祈りを通して慰められ、赦しを信ずることを与えられ、そしてまた天にある大いなる喜びを仰ぎ見て、ではこのご用を務めさせていただきましようという気持ちになるのではないのでしょうか。以上、三分の二は私自身の証しとさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

(二〇一一年二月九日、二〇一〇年度「全学礼拝懇談会」発題)